2024（令和６）年度　神奈川県立保健福祉大学

一般選抜（後期日程）

入学者選抜

小論文試験
問題用紙

- 試験時間は 90 分です。
- 指示があるまでは中を見てはいけません。
- 解答はすべて解答用紙に記入してください。

問題

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

＜前略＞

■主題（テーマ）と問い ― 問いをテーマの中心に据える

人と議論する場合であれ、自分一人の頭の中で思考実験的に議論をする場合であれ、①議論（argument）をするとき、私たちはあるテーマ（主題）を中心に考える。もっと日常的な会話のレベルでは、話題と言い換えてもよい。そこでのことばのやり取りが、たんにその場での情報や意思の伝達、あるいは楽しみのための会話であれば、そこからの「発展」が期待されるわけではない。それに対し、議論（argument）が必要となるのは、そこに何らかの発展や展開が意識され目的とされているときである。互いの知識や意見や考え方を提示し、それに対する相手の反応を期待し、それに応じて、自分だけでは到達しにくいレベルにまで思考や知識を発展させたいとき、私たちは議論をする（自分だけの模擬的な議論であれば、頭の中で一人でそれをやってみる）。もちろん、そこにはテーマがあるはずだ。何について話し合っているのかを示す、話の中心となる対象のことである。「○○について話し合って（ディスカッションして）みよう」という場合の、○○である。

あるテーマにアプローチするとき、そこにどのように切り込んでいけばいいか。どのようにそのテーマについて、自分の見解や意見を考え、まとめていけばいいか。それを導き、枠づけるための方法が、「問い」からのアプローチである。あるテーマについて、自分なりに問いを立て、その問いに答えようとすることで、考えを展開していくという方法である。

たとえば、ある事柄（テーマ）について、自分が賛成（支持する）か反対（支持しない）かという、イエスかノーかというのは一つのシンプルな問いの形である。あるいは、ある事柄（テーマ）について、具体的な例は何か、同じような例は他にないか、という問いも、考えを展開させる手助けとなる（具体化や例証）。他のことばで言い換えるとどう言えるのか（概念化）、とか、どんなことにたとえることができるか（比喩）、なども、ある事柄を別の視点から理解するために役に立つ問いの形である。さらには、ある事柄には、どんな特徴があるのか、その特徴をつかむときに、どんな側面に注目すれば複数の特徴について考えることができるのか、なども、あるテーマを考えていくときの入り口となる問いである。さらに、もっと議論が進んでいくと、なぜそうなるのだろうか、といった原因や理由に関する問いを立ててみると、もっと複雑で高度な議論に発展できる。

いずれにしても、問いを立てて、その問いを発展させていくこと（ここではそれを「問いの展開」と呼ぶ）が、主題（テーマ）についての考え方を発展させていくときの、考え方のステップとなるのである。それというのも、テーマとなる事柄について、私たちはある程度の知識や情報を持ち合わせているが、その知識や情報を使いこなす上で、テーマについてどのような問いを通して切り込んでいくかが鍵となるからだ。あるテーマに関する知識をうまく使いこなすためには、その知識から発する問いと、その②知識が答えとなるような問いの展開が、議論を進める上でのテコの支点となるのである。

相手がいるときの議論（討論）ばかりではない。たとえば、大学の授業で小論文やレポートを書くとき、卒業（研究）論文を書くときにも、どのように問いを立てるか、どのように問いを展開するかが、思考を発展させる際の重要なステップとなる。授業で小論文の課題が出されたときにも、その課題に

どのように答えたらよいかを考える。そういう場合にも、自分なりに、その課題を別の問いの形でとらえ直したり、そうやってとらえ直した問いを展開したりすることで、いい論文が書けるようになる。卒業（研究）論文の場合にも、そもそも自分でテーマを設定するときには、研究すべき問い（research questions）を立て、それを展開する形で論文を構成していかなければならない。学校や大学で学ぶ際にも、問いを使いこなす技術が求められるのである。

大学などの学びの場だけではない。社会に出てからも、私たちはさまざまな問題や課題（problems）に直面する。問題・課題への解答が求められることもある。その解答が、自分の判断になることも、自分の行動を決めるときの規準になることもある。こういう、さまざまな問題・課題（problems）に出会ったときに、それをどのように考えていったらよいのか。その場合にも、その問題（problems）を問い（questions）としてとらえ直し、その問いへの答えを考えていくことで、その問題（problems）をより広くあるいはより深く理解し、適切な解決策を導くことが可能になる。実社会での問題解決（problems solving）に迫られたときにも、問いの立て方と展開という思考の技術が使えるということだ。 ＜中略＞ コミュニケーションが不毛になるような状況を打開するのにも、問いについての自覚が鍵となる。問いの共有の有無や、問いと問いとの微妙だが重要な違いに目を向けることができる、さらには問いを思考の支点において議論の展開を図る。いかに問いを編集するかによって、不毛な論争や当たり障りのない「話し合い」で終わってしまう、見かけ上の「議論」から逃れる方法が見つかるはずである。学校や大学での学習や研究の場面だけでなく、仕事の場や社会生活の上でも、一面的な見方にとらわれたり、安直に分かったつもりで終わってしまう議論や思考にならないためにも、問いの立て方と展開の仕方を身に付けることは役立つ思考力の要となるのだ。

＜後略＞

出典：苅谷剛彦・石澤麻子『教え学ぶ技術 ― 問いをいかに編集するのか』
（序章「問いを編集する」とはどういうことか）ちくま新書、10-14頁、2019年、一部改変

問１　下線部①「議論（argument)」は、会話とどう違うのか。本文における意味の違いを、日本語70文字以内で説明しなさい（文字数は厳守すること）。

問２　下線部②「知識が答えとなるような問い」とは、どのようなものか。知識から発する問いとの違いを明確にしながら、日本語100文字以内で説明しなさい（文字数は厳守すること）。

問３　筆者の主張を踏まえて、あなたは大学でどのような学びをしていきたいか。日本語700文字以上800文字以内で述べなさい（文字数は厳守すること）。